

基調講演

未来に生きる子どもたちのために

— おとなは何がしたいのか? —

安西祐一郎 (日本学術振興会理事長)

少子高齢社会で大人は何が「したい」のか? この問いに対して、以下4つの観点から考察する。

1. 子どもたちが生きていく

未来の社会はどんな社会になるのか?

近い将来、人口構造、産業構造、就業構造等の大きな転換が起きる。しかし、未来の社会がどうなるのかという問いへの答えはない。したがって、未来に生きる子どもたちのために「新しい学び」への転換が必要である。

2. 社会で生きていくための学びとは?

2020年に、小学校に新しい学習指導要領が入る。これまでの学習指導要領は、同一の学力を要素として、教える内容に重点を置いていたが、新しい学習指導要領は「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」という、学び方を格子とした画期的なものになる。それは子どもたちに、5つの生きる力を学ぶことが重要であることを提言する。すなわち「主体的に生きる」「多様な人々と生きる」「協力して生きる」「感謝して生きる」「誇りにして生きる」力を学ぶことである。そして、その「生きる」を支えるのは、人とのつながり、応援してくれる人がいること、安心して戻れる場所があること、そして温かい記憶である。

3. 未来に生きる子どもたちのためにおとなは何を「すべき」かではなく「したい」のか?

「すべきだ」ではなく、「したい」というのが重要である。「すべき」と違い、「したい」には自発的なエネルギーがある。高大接続改革は、私がまさにやりたいからやっていることなのである。

4. 認知過程の研究は1~3にどんな示唆を与えるか?

子どもは、周囲の環境とのインタラクションによって、共感・コミュニケーション機能、社会的状況・文脈の認知機能、知覚・運動・感情・記憶機能、問題解決・思考機能、言語機能等を発達させていく。これらは個別で考えるのではなく、相互に関連するものとして捉える必要がある。これらの研究の積み重ねから、人間は「自分でさまざまな新しい目標を創り出し、それに向かって進むための、すばらしい心理的能力を発揮することができる存在」であることも説明できるようになってきた。

大人は、子どもが自由に目標を創り出していく能力を発揮できるように支援することが重要な役割となる。そのためには、組織を超えて、皆がインタラクションしながら、共に理解し合い、これからの社会を自分たちで作っていくことに尽きるというのが、本講演での結論である。

〈プロフィール〉

Yuichiro ANZAI

日本学術振興会理事長、平成27年度文化功労者。1974年慶應義塾大学大学院博士課程修了。カーネギーメロン大学助教授、北海道大学文学部助教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て、93年~2001年同理工学部長、01年~09年慶應義塾長。現在、独立行政法人日本学術振興会理事長、文部科学省顧問、日本ユネスコ国内委員会会長等を務める。中央教育審議会会長、高大接続システム改革会議座長等も歴任。著書に『心と脳』(岩波新書)、『教育が日本をひらく』(慶應義塾大学出版会)、『認識と学習』(岩波書店)、『問題解決の心理学』(中公新書)ほか多数。専攻は認知科学、情報科学。

